それは一体誰の責任なのか

一週間に１回、「図書」の時間があります。

今までも、思い思いの本を読んだり、ビブリオバトルに取り組んだりと、読書に関する活動を行ってきました。

第３クォーターが始まってからは、「読み聞かせ」を中心に学習が進んでいます。

なぜかというと、プロジェクト学習との「連動」を図るためです。

プロジェクトとは、合科的な学習です。

合科とは、色んな教科が組み合わさっている内容のこと。

国語だけでなく、算数だけでもなく、色んな教科の学びを連動させながら学習は進んでいきます。

いわば探究学習における「練習試合」のような位置づけです。

探究では、個人個人で現時点の力をぶつけて学びを切り開いていきます。

いわば、本番の試合のような位置づけですね。

一方プロジェクトでは、実戦形式でどのぐらい教科の力を使えるのかを試しながら鍛えていく場です。

まさに、練習試合の位置づけがピッタリくるといえるでしょう。

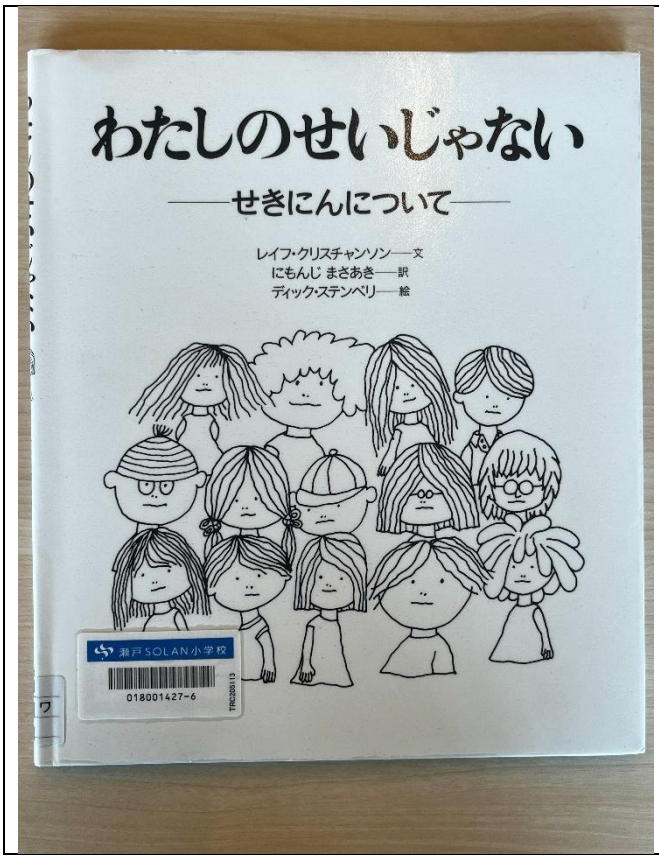
それに対して、国語や算数や社会や理科などの強化学習は、「練習」に該当します。

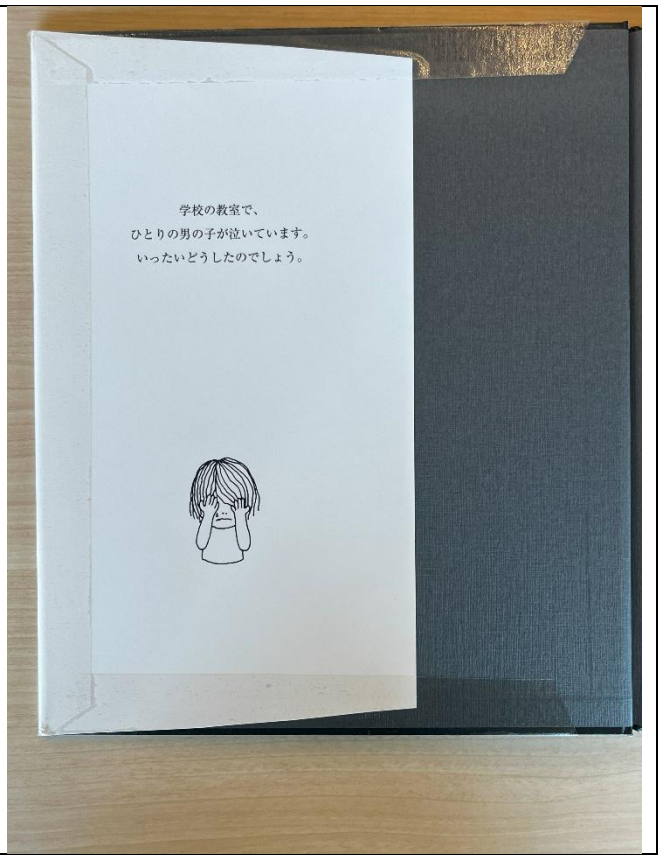
野球で例えるならば、

素振り、ランニング、キャッチボール→教科学習
練習試合、シートノック、総合打撃練習→プロジェクト学習
試合本番→探究学習

のようになります。
　プロジェクトは合科学習ですから、教科で学んできた力を連動させて行うものです。
　吉賀先生に現在読み聞かせを中心に行っていただいているのは、現在行っている「物語プロジェクト」の内容との化学反応を起こすためです。
　夏前から、吉賀先生とは何度も打ち合わせをしました。
　「物語プロジェクト」では、「命」をテーマとした物語の読み取りを行っているところです。
　その深い読み取りを行うためには、「分析のものさし」を獲得したり、「討論の基礎スキル」を磨いたり、辞書引きや自分の意見文を書けるようになることなどの様々な力を磨いておく必要があります。
　さらに、「多様な作品」に触れておくことも必須の学びであることは間違いありません。
　「命」という抽象的なテーマについて深く考えるためには、色んな角度から「命」にアプローチする必要があるからです。
　けれども、その「多様な作品に触れる」ということ一つをとってみても、「自由に読書してごらん」では個人によって達成度はまちまちになってしまいます。
　そこで、プロの力を借りることにしました。
　吉賀先生は、選書のプロです。
　プロジェクト学習の構想を詳しく説明し、「命」に関連した作品を連続的に「読み聞かせ」してもらう中で、読み取りや分析の視点を広げ、深めていこうということで現在の図書の時間が設定されているということです。
　この計画は、現時点ですでに大成功の手ごたえを感じています。
　毎週吉賀先生が読み聞かせを行ってくださっている作品に触れるたびに、子どもたちが「命」について考え、「生きるとは」「成長とは」「人生とは」と関連するテーマについて掘り下げていく姿が見られるからです。
　絵本だけでなく実写の本があり、ものすごく抽象的なテーマの本があれば思い切り具体に迫る本もあります。
　このバリエーションがつけられた本を、毎週読み聞かせしてもらえることはとてつもなく大きな価値を含んでいると言えるでしょう。
　実際に、授業参観に来られたお家の方々からも何度も異口同音に次のような声が聞こえてきました。
　「こんな勉強が小学生からできて幸せですね」と。

一昨日の読み聞かせも「凄い」の一言でした。
今回の作品は、これです。





作品は、次のようにスタートします。

学校の教室で、ひとりの男の子が泣いています。 いったいどうしたのでしょう。

次のように話は続きます。

ここまでを読んで、すでに子どもたちは「あっ」と何かに気付いた様子でした。

吉賀先生は、落ち着いた口調で読み進められました。

お話がどんな風に続き、最後はどんな展開になっていったのか、もしできたらぜひお子さんに尋ねてみてください。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6lFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit